

ルーカス・クラナハと アンドレアス・フォン・ボーデンシュタインの 《天国行きと地獄行きの馬車》

ガービー・ヘルヒャルト
(デュースブルク=エッセン大学教授)

青山愛香 訳

はじめに

ルターこそが宗教改革の光明であり、改革の立役者として、またドイツの英雄として文化的記憶の中に刻まれている。しかし、中世のどの時代を通じてもローマ・カトリック教会の内部において旧来の形とは異なる信仰のあり方を模索する改革努力が見られた。だが、それらの成果はごくわずかであった。その主導者のほとんどが異端とされ、地下に追いやられ、撤回を迫られ、無慈悲にも抹殺された。13世紀以来、異端審問は恐怖を与えることでカトリック批判が拡大しないように配慮してきたのである。だが、中世後期はあらゆる分野で多くの変化と分断があった激動の時代であり、聖職者や信徒側から教会への批判が高まったのは当然であった。ヴィッテンベルクで始まった宗教改革は、当初は数ある改革運動の一つであったが、最終的には最も効果的なものとなった。当時の資料や証言を検証すると、そこにはネットワークで結ばれ、常に交流したり依存し合ったりするグループの他、独立して行動したり、互いに対立したりする者も混ざり合った改革者たちの集団があったことがわかる。その中でルターの仲間であり、戦友であり、後には敵対することになった人物が、カールシュタットとして知られるアンドレアス・ルドルフ・ボーデンシュタイ

ンであった。宗教改革の初期段階において果たした彼の役割については、近年明らかになりつつある。

II. 1519年頃のアンドレアス・ルドルフ・ボーデンシュタインの神学思想

1486年にフランケン地方の町カールシュタットに生まれたアンドレアス・ルドルフ・ボーデンシュタインは、その姓に故郷の名であるカールシュタットを加えて名乗った。24歳で司祭に叙階されると、同時に神学の博士号を取得し、1512年にはヴィッテンベルク大学の神学教授として3歳年上のマルティン・ルターに博士号を授与している。ボーデンシュタインもルターや他のヴィッテンベルクの改革者たちと同様に、ルターが精神的な父と呼んだヨハネス・フォン・シュタウピッツ（1465-1524）の影響下にあった¹⁾。

アウグスティヌスがルターの神学の中心になったとき、ボーデンシュタインはまずルターを論破しようとしたが、後にはシュタウピッツを引き合いに出してより激しくアウグスティヌスに傾倒するようになった。特にボーデンシュタインに影響を与えたのは、ペラギウスに抗するアウグスティヌスの著作であった。アウグスティヌスはこの著作の中で、元から罪深い存在である人間が自らの努力によって神を認識し、神の御心になつた生き方をすることはできない

* 本稿は獨協大学国際共同研究主催ワークショップ「ドイツ・ルネサンス芸術の研究——ドイツ・ルネサンス美術における革新性（イノベーション）とは何か III」（於：獨協大学 2019年3月22日）の講演原稿に加筆・修正を行ったものである。

* 図版中の吹き出しの番号は訳者が付与。番号は Erwin Mühlhaupt, Karlstadt "Fuhrwagen": Eine frühreformatorische Bildzeitung von 1519, in: Luther 50 (1979), S. 60-61 による。

* 訳註で補ったボーデンシュタインの《天国行きの馬車と地獄行きの馬車》（1519年）のピラおよび『解説』の二つのテキストの書き起しは、ゲッティンゲン大学のプロジェクト Kritische Gesamtausgabe der Schriften und Briefe Andreas Bodensteins von Karlstadt (= KGK II: 1519) を参照した。現在デジタルライブラリーで閲覧可能である。ここには Alejandro Zorzin による詳細な解説もある。(http://dev2.hab.de/apps/edoc/view.html?id=kgk_downloads; 2023年1月5日閲覧)

1) Leppin, Volker: Martin Luther. Darmstadt 2010², S. 81 を参照のこと。

と主張する。そして人は神の恩恵を求めて懇願することはできても、それを善行や神学研究によって得ることはないとした。神が顕現して恩恵を受けるのは、あくまでも神の裁量による。もし神を啓示によってのみ知り得るのであれば、論理的な議論や哲学を通じて神に近づこうとするスコラ神学者の努力は、正しい信仰から遠ざかる無益な努力である。1517年4月26日、ルターより半年も早く、ボーデンシュタインは『自然、法、恩寵に関する151の論題。スコラ神学と通説に抗して』と題し、当時の学問的神学を否定した。同じ日、彼はシュタウピッツを通じてその思想に触れていた神秘主義者ヨハネス・タウラー(1300年頃-1361年)の説教集を手に入れた。この本は現存しており、ボーデンシュタインの手書きの余白のメモから、彼が特に「十字架に従う」というテーマに関心を抱いていたことがわかる²⁾。神秘主義者タウラーの説教集は、啓示と合理性、信仰と知識に関する哲学と神学の議論が最高潮に達していた時代に属し、アリストテレスの合理性を踏襲するスコラ神学的原則に、理性による神の認知の可能性を否定する神秘主義的潮流が対抗している。神秘主義者はアウグスティヌスを参照しながら、世俗的なものに限定された合理的な知識は、より高い洞察に達することができないという前提から出発した。ボーデンシュタインは、神の恩恵と顕現があるならば、内なる省察だけが真理へと導くと考え、そのような認識のプロセスの前提として、すべての世俗的なものから目をそらすことが肝要だとしたのである。人はこの世のしがらみ、富、権力、名声を捨て、神の意志に完全に身を委ねなければならず、そのために己を捨て、己の意志を捨てなければならない。つまり、すべてを手放す前提として、己の罪深さを非難しなければならないが、これは絶望からではなく、謙虚な気持ちから行われるものなのである。タウラーの主要な思想の一つである自己の断罪と消滅は、このように神と一体になるための前提条件であると考えられた。特にタウラーは告解の理解に根本的な疑問を投げかけている。告解は一回限りの行為ではなく、内なる悔恨と告解が全生涯を決定するのであり、それは

2) Joestel, Volkmar: Andreas Bodenstein genannt Karlstadt. Schwärmer und Auführer? Wittenberg 2000, S. 14を参照のこと。

恐怖からではなく神への愛によって突き動かされたものでなければならない。罪深い人は己の罪深さを非難し、救い主キリストに立ち返り、その傷の中に神の意志を認識しなければならないのである。タウラーはキリストの十字架のように、人は謙虚に自分の苦しみを引き受け、喜んでそれに耐えねばならず、神の意志に完全に従った時に人は初めて誘惑や苦しみを救済の一部と認識することができると考えた。このような十字架に従う生き方は神の恩恵と平和への道を準備するものである。

このような、心の平穩、我意の否定と消滅、十字架への追従、苦しみと平和は、アウグスティヌスやヨハネス・タウラーに続いて到達したボーデンシュタインの神学の中心概念であった³⁾。神秘主義の伝統の中で、彼は人間と神との関係は個人的かつ直接的であり、神が顕現した時に初めて真実に至るものと考えた。このボーデンシュタインの神学的アプローチは、厳格なアリストテレスの論理に従う、複雑な教義体系を指向する支配的なスコラ神学の伝統とは対立するものであった。スコラ神学のアプローチの実践的帰結は、人は徹底的な研究に基づいて自身の人生を神の意志に従って方向づけ、美德、善行、適切な告解を通じて神の恩寵が得られると確信するに至るものである。免罪符の販売もこの徳と善行の義の働きによる結果であった。

ヴィッテンベルクに新しく設立された大学は当初から人文主義を志向していたが、そこにも通常のスコラ神学の伝統は受け継がれていた。ボーデンシュタインは、真理には論争を通じて到達することは不可能であるとして、大学の神学研究にアウグスティヌス的な意味での革新的な改革を求めたのである。それを支えたのが同じ立場のマルティン・ルターであり、この時期の彼の最も近い仲間であった。

3) Hasse, Hans Peter: *Karlstadt und Tauler. Untersuchungen zur Kreuzestheologie*. Gütersloh 1993 (= *Quellen und Forschungen zur Reformationsgeschichte* Bd. 58), bes. S. 56-75.

III. ヨハネス・エックとの論争の一環としてのビラ

インゴルシュタットの神学者ヨハネス・エック（1486-1543）は、初めはむしろ宗教改革運動に好意的だったが、ヴィッテンベルクの動きにいよいよ挑発されているように感じ始めた。彼はボーデンシュタインとルターを免罪符、意志の自由、義認、ローマ教皇権に関する公開討論に招待した。この討論会は1519年6月27日から7月15日まで、ライプツィヒで開催された。ボーデンシュタインはこのイベントを前にして、ビラ『天国行きと地獄行きの馬車』を出すことで相手の評判を落とし、仲間内に留まらず広く一般にも自説を喧伝するために攻撃に出たのである。

16世紀、改革者たちが新しい思想を効果的に実現するために使った新しい媒体がパンフレットやビラである。書籍と違い、制作や流通が迅速かつ容易であったため、神学的な議論が短期間で広く一般に行き渡った。当時の識字率は5%と非常に少なかったが、その内容は口伝でも伝わるため、マスメディアとして機能した⁴⁾。市場や旅籠で音読されるので、読書に不慣れな人でも議論に参加することができたのである。多くのテキストは対話形式や韻を踏んでおり、読み書きができない人のためにはしばしば挿絵が記憶の助けとなった⁵⁾。ボーデンシュタインもイラスト入りのビラを使ってエックとの争いを公にし、相手を事前に誹謗中傷することでさらに論争を盛り上げた。彼の挑発が成功したことは、この出版物に対する反応を見れば明らかである⁶⁾。このポスターは、

4) 【訳註】永本哲也「宗教改革時代の印刷物を分析するための視覚——カールシュタット「天国と地獄の馬車（1519年）を中心にして」、獨協大学『ドイツ学研究』第79号、2021年、p. 89-157を参照のこと。

5) Kraus, Jutta: Von „Laufzettelein, die sich selbst auf die Beine bringen“. Die ersten Massenmedien. In: Beyssig sein ist nutz und not. Flugschriften zur Lutherzeit. Katalog zur Sonderausstellung „Blätterwald“ vom 6. August -31. Oktober 2010 auf der Wartburg, Eisenach 2010, S. 7-24, hier S. 17f.

6) Mühlhaupt, Erwin: Karlstadts “Fuhrwagen”. Eine frühreformatorische “Bildzeitung” von 1519. In: Luther Bd. 50 (1979), S. 60-76, hier S. 61.

ボーデンシュタインの反対派によって引き裂かれ、エックは選帝侯に苦言を呈した。クラナハの挿絵による大判（29.8×40.5cm）の木版画（図 10）は学識経験者と一般人の両方に対応するため、初版ではラテン語、第 2 版ではドイツ語に翻訳された。だが、このテキストはそれぞれの神学的立場について書かれたものである。相応の予備知識がなければ読み解けない聖書の引用や教義が含まれ、韻を踏んで行われる論争も含まれている。クラナハのイラストはこの論争を明確にし、なんとか一般にも理解し易いレベルまで視覚化しているのであるが、このビラの内容は現代の読者には理解し難いものである。ボーデンシュタインの後ろ盾で、フリードリヒ選帝侯の秘書兼財務官であるデーゲンハルト・ブフェッフィンガーもこのビラの内容が不明瞭だと指摘したため、ボーデンシュタインは 50 頁ほどの解説を作成し、改めて自身の見解を表明した。この小冊子は 1519 年に「Außlegung vund Lewterung etzlicher heyligen geschriften/ So dem menschen dienstlich vund erschießlich seint zu Christlichem leben」というタイトルで刊行された⁷⁾。ビラの中で省略された引用や引用文の一部は、解説のパンフレットでより詳細に紹介されているが、依然として多くの不明な箇所があるのも事実である。

IV. 天国行きと地獄行きの馬車⁸⁾

ビラ（図 10）は画面の真ん中で分割され、上下二段において対角線上に内容が対立するように構成されている。上半分には神へと通じる正しい道を走る馬

7) Universitäts- und Landesbibliothek Sachsen-Anhalt. Digitalisierung von Drucken des 16. Jahrhunderts. Außlegung vnnnd || Lewterung etzlicher heyligenn geschrifften, So dem menschen dienstlich vnd || erschießlich seint ... Karlstadt, Andreas Leipzig, 1519. VD16 B 6113

8) ビラと『解説』のいずれのテキストも Hans Georg Thümmel によって編集出版されている：Karlstads und Cranachs „Wagen“ von 1519. In: Haustein, Jörg und Oelke, Harry (Hrsg.): Reformation und Katholizismus. Festschrift für Gottfried Maron zum 75. Geburtstag. Hannover 2003, S. 66-96. 本稿では Thümmel の現代語訳にすべての箇所に従ってはいない。

車が描かれ、下半分には地獄へ直行する馬車が描かれている。神の方へ導かれる馬車が8頭の馬によって引かれているのは、8という数字が天国の完成と復活を表しているからである。一方で地獄行きの馬車は7頭の馬に引かれており、これは世俗を象徴している。上段の馬は強固な手綱で先導されているが、あまりの道の険しさに手綱を振り解いたものもある。一方で下段の馬は、あたかも己の意志で疾走しているかのように地獄の口へ向かって疾駆している。こうした二項対立の構成は様々な細部においても確認できる。すなわち、上-下、正しい道-誤った道、神への道-地獄への道、神の恩寵-意志と理性、聖書-善行と寄付、真実-嘘、平信徒-聖職者/スコラ神学者という具合である。

ボーデンシュタインは、用紙の幅いっぱい記された最上部の文言(図10)において、このビラの解説を出版する予定であることを告知し、このビラの注釈は聖書とその教えから引用されているので、正しい信仰を持つ者は上の道が正しい道であることを即座に認識できると断言している⁹⁾。反論されたら即反撃すると警告することで、ボーデンシュタインはエックとの論争の前哨戦において自分の立場が正しいことを主張し、論敵を脅しているのである。

上段の下部中央の銘帯には、作者のラテン語名アンドレアス・カロロスタディウス Andreas Carolostadius と記されている(図10)。この銘帯の文言はボーデンシュタインの信仰告白であり、彼の神学の核心部分にあたる。*Wir seint machtloße sunder und arm. Got mach unß dan warm. darumb o vatter Christi zybe*

9) 【訳註】 Will Gott. Szo wort vorteutsche erklerung. beder wagen. mit yren anhengigen spruchen. kurtzlich gedruckt auszgen. Ausz welcher. yeglicher wol ermesen mag. was yedenn Christglaubigen zu wisszen. not ist. Dan an zweyfel. welche diesze wagen. |mitsampt eyngeliebten schrifftten betrachten. werden. ersynnen und bschlissen. das reeden. des obersten wagen. Christlicher tzucht erschieszlich. und widderumb. wortlin des understen. undienlich und schedlich. eynen auszgezogen. Das ich alles. durch hey-|lige schrifftten und lernern bekreffügen magk. Derhalben gelustet ymants schrifftten obermelt anzufechten. der kum fruschlich. mit Christlichem swerd das ist gottis wort. sonst mugte ich auch schelden. unnutzen (wie wol mir der weeg widder) unde nicht helen. (KGK 120, S. 187, Z. 1-9. *Auslegung Wagen* に記載なし。)

unß wol. ubergeuß deyn gnad vol. sprich/ zu unß sey gesund. schließ auff hertz unnd mund. Szo kumen wir mit lobesangck unnd grossem danck etc. Andreas Carolostadius. (我々は貧しい無力な罪人です。神ではないものが我々を昂揚させる。キリストの父よ、だから我々を正しく導いてください。あなたの慈悲を注いでください。我々に「健康であれ！」と言ってください。私たちに氣にかけてください。そうであれば我々は賛美の歌と大いなる感謝の気持ちで歩みます。云々。アンドレアス・カロロスタディウス)¹⁰⁾。図の下半分の上端には、もう一つ大きな銘帯がある(図10)¹¹⁾。その中でポーテンシュタインは、アリストテレスに基づくスコラ神学者の見解をまとめている。ポーテンシュタインによれば彼らの最大の誤りは聖書にも信仰にも反して人間が自ら善行を積めると思い込んでいる点にあり、彼は聖書を引用しながら神のみが人間に恩恵を授けて導くことができることを証明してみせる。この箇所は下段中央にある別の銘帯(図10)に

10) 【訳註】KGK 120, S. 191, Z. 5-8. *Auslegung Wagen* に記載なし。

11) 【訳註】Etzlicher lerer disputation spricht. unser wil mit gutten wercken auszbricht. und sie durch sich sel-|ber macht. Ist aber ymants der nit gesteet. das unszer wil forgeet. der sal vor unszer schriff. so |ym Aristoteles nit hilfft. als butter gegen feur smelzen. und sich mit Credere wol peltzen. |Jeremias. kerent euch zu gott schreyt. Szo keret gott zu euch allezeyt. David<.> Geent zu den |licht und werdet erleocht. Jacob mit wercken in gewissen berufung fleucht. Paulus sagt. lauffent |dz ir ergreyft. Darwidd'er' einer peyfft. Got zucker macht und erleucht. aber wir kunnen distinguiren|uns durch knoden furen. Exemplum. Sine me nihil potestis facere, das ist war entlich . ma inchoative lassa mi fare. (KGK 120, S. 191-192, Z. 14-15, Z. 1-7.) Hye vernym freuntlicher man/ was eygenn wilk kan/wye yn tzanckische disputirer/auffheben mit Heydnische lerer/ den niemantz einsagen darf/ er wollte dan dulden ketterischer straff. Also ir disputation spricht. Unser wil mit freyhen wercken außbricht/ und ir substanz selber macht. Ist ader ymants der gottis wercke grosser acht/ und nit gestehet/ das uns wil fur geet/ der mus vor unßer schriff/ so ym Aristoteles nit hilfft/ als schne bey feur smelzen/ und sich mit dem Credere beltzen. weyl wir auch nit dorffen das Credere flyhen/ wollen wyr schriffen tzu uns tzihen. |Jheremias/ kerent euch zu got schreyt. So kere ich tzu euch alle tzeit. David [/] gehent tzum licht und werdet erleucht. Jacob mit wercken in gewiß berufung fleucht. Paulus sagt lauffent das ir ergreufft/ dar gegen einer pfeufft. Goth macht tzucker/ wercke/ und erleuchtung/ Mit schriften gleycher meldung. Aber wir kunnen wol distinguiren/ und uns durch alle knoden furen. Exemplum [/] Sine me nihil potestis facere/ dz ist war perfecte/ ma: inchoative lassa mi fare. (*Auslegung Wagen*, KGK 124, S. 260, Z. 2-19.)

対応しており、そこではスコラ神学の自己中心性と無知について韻文で要約されている。*Jeglichem behagt das Seine. Daber preise ich auch das Meine.* (人それぞれ、好きなように。だから、私も好きにする)¹²⁾。

次に馬車の乗員に移りたい(図1)。右上には「キリスト行きの馬車 *der wag zu/Christo*」(Nr. 8)と書かれた馬車に、目を伏せ、両手を組んで祈る平信徒が座っている。彼は内省的で、その姿勢からは謙虚さが感じられる。



図1

彼はスコラ神学的な教えによって誤った道に陥る学識ある聖職者の対極にある存在であるが、それと同時に大多数の平信徒が己をその中に同一視することが可能な人物像でもある。1520年代以降の著作の中で、ボーデンシュタインも自身を「新しい平信徒」あるいはアンドレアスの兄弟もしくは隣人と呼び、博

12) 【訳註】 *yglichen behagt das sein./Darumb preisz ich auch das mein.* (KGK 120, S. 194, Z. 2.).

士という学位とそれに付随する権利を放棄している。この平信徒は、超然と己に向き合う新しい内省的な神の友の理想像である¹³⁾。目を閉じ、前屈みになって両手を組む姿は内なる思索、すなわち神に完全に集中するために一切の世俗的なものから離脱していることを示している。彼は頭上の格言 (Nr. 5)¹⁴⁾ が示すように、我意の否定と放棄の道を歩むことに成功したのである。馬車の前端にある十字架は、彼が十字架に従うことを象徴している (Nr. 7)¹⁵⁾。十字架は常に彼の眼前にあり、彼を祝福している。キリストのみが救いの道であり、聖書は神への道を指し示すのみで罪や不幸や死からは救ってくれないというアウグスティヌスの言葉 (Nr. 6)¹⁶⁾ が、馬車の脇に配された。平信徒のすぐ後ろには

13) Hasse, Hans-Peter: Zum Selbstverständnis Bodensteins. In Bubenheimer, Ulrich und Oehmig, Stefan (Hrsg.): Querdenker der Reformation – Andreas Bodenstein von Karlstadt und seine frühe Wirkung. Würzburg 2001, S. 49-73. ここでは S. 64 を参照のこと。

14) 【訳註】 図 1 < Nr. 5>: Ausz mir furent mich/So ich mich ansehe/erschreck ich. Wie gern/wer ich mir frem/Wan mich recht erken/Aug ustinus Bern hardus: (KGK 120, S. 189, Z. 6-7 *Auslegung Wagen* に記載なし) 「我意を放棄させ給え。己をうち眺める時、私は驚愕する。もし私が本当に己を知るならば、私はどんなに己を捨てたいと願うだろう。アウグスティヌス ペルンハルト」 Ausz mir furent mich/ So mich ansech erschreck ich/ Wie gern wer ich mir from/ Wan mich selbest erkon/ Bringt mich von meinem kot /Ich drieff ausz grosser not. (*Auslegung Wagen* KGK 124, S. 250, Z. 10-15.)

15) 【訳註】 図 1 < Nr. 7>: durch dein Creutz/Mach mich selig. (KGK 120, S. 188, Z. 3) 「汝の十字架によって、祝福をお与えください。」 [...] und magst sprechen durch dein creutz/dastu mir gegeben/reinigestu mich/machst mich ledig und selig. (*Auslegung Wagen* KGK 124, S. 254, Z. 18f.)

16) 【訳註】 図 1 < Nr. 6>: Gots schriff ist gut und heilig./Und macht die sund krefftig./Dindt ubertretung zorn und tot./Bschlust all menschen in not./Gemert begerung. furent yn schand./Dz Christus einiger heyler werd bkant/Paul us. et Aug ustinus (KGK 120, S. 188 Z. 10- S. 189 Z. 1) 「聖書は善きものであり聖なるもの。それにも関わらず罪は重くなる。聖書は不当に使われる。怒りと死が全ての人間を危機に閉じ込める。激しい欲望は破滅へと至り、それはキリストが唯一の救世者であることを明らかにする。パウロとアウグスティヌス。」 Wiewol gotlich schriff ist gut und heilig. /Dannach macht sie die sunde krefftig/heuffig. /Dient uberteetung tzorn vnd todt./ Beschleust all menschen in not./ Gemeert bosz begerung/dartzu sundlich bandt. /Damit Christus allein heyler wert erkant. Und hab yn der schriff kein trost./Der werden wil in Jesu erlost. (*Auslegung Wagen* KGK 124, S. 242, Z. 4-11.)

彼の人生のモットーである「汝の御心のままに！」(Nr. 3)¹⁷⁾を表明する銘帯が掲げられている。馬車の車輪に貼られた文言(Nr. 4/9)¹⁸⁾(図2)が、悔い改める者は神の慈悲と正義を期待することができることを確信させるが、この2つの銘帯の間で、悪魔は必死にこの馬車の車輪を止めようとしている。



図 2

下の馬車には典型的な学者の正装をしたスコラ神学者が座っている。彼は断固とした眼差しで前方を見つめて大袈裟な身振りで両手を広げているが、背後に後ろを向いて物思いに耽る悪魔を伴っていることには、明らかに気づいていない。(図3)

17) 【訳註】 図1<Nr. 3>: Dein wil der|geschech. (KGK 120, S. 189, Z. 5) 「汝の意志が成れ」 Dein will gesche. (*Auslegung Wagen* KGK 124, S. 249, Z.14), Mt 6, 10 Vg Fiat voluntas tua sicut in daelo et in terra.

18) 【訳註】 図2<Nr. 4>: Got sein folck nit| veracht. weil gere|chtigkeit im urte|yl wacht. Ps 93. (KGK 120, S. 189, Z. 2) 「主はその民を捨てず。その嗣業を見捨てられないからである。(詩篇 94)」 Got sein volck nit vorlast/ weil gerechtigkeit in das urteyl widerkeret/[...] (*Auslegung Wagen* KGK 124, S. 212, Z.14f.); <Nr. 9>: Du hast mein gewissen/bewegt und in hart bdreng/gelegt. dem bisz gnedig./Den du gemacht hast/reuhig. ((KGK 120, S. 189, Z. 3-4) 「汝は私の良心を揺さぶり、苦境へ陥れた。悔悛した者を憐れみたまえ。」 Du hast mein gewissen bewegt/Und in hart gedreng gelegt/ Nun bis dem gnedich/ Den du machest reuich. (*Auslegung Wagen*, KGK 124, S. 247, Z. 30-S. 248, Z. 2) この文言は、右上の馬車の対角線上にある左下の馬車の文言と対比されている (So vernufft sunden/ betracht. und eigner/wil veracht. machen/sie leyt und reu etc.) 「理性が罪を認識し、己の意志を蔑むならば、それは苦しみと悔恨をもたらす。」



図 3

この聖職者の馬車には「我意」(Nr. 39)¹⁹⁾の文字が刻まれている。この人物は自身の信念が書かれた「善い行いは自分の意志からなる」(Nr. 35)²⁰⁾と「神から一度得た恩恵は失われない」(Nr. 40)²¹⁾という、2つの吹き出しを両手で掲げているようにも見える。その頭上にはそこから導き出された合理的な結論

-
- 19) 【訳註】図3 < Nr. 39 > : Eigner wil. 「我意」(KGK 120, S. 193, Z. 6 *Auslegung Wagen* に記載なし。)
- 20) 【訳註】図3 < Nr. 35 > Unser wil ma/cht guter wer/ck substantz. 「我々の意志が善行に実態を与える。」 Bevar dich vor den vermuschten Theologen/di lernen/ das der mensch gutter werck substantz macht. Als Capreolus leret/und die christglaubigen verfuert. (*Auslegung Wagen* KGK 124, S. 221, Z. 5-7.)
- 21) 【訳註】図3 < Nr. 40 > : gots gnaden eins/gegeben kan ich an/neu hulf geleben. 「神の恩寵を一度授かれれば、助けなしに生きることができる。」(KGK 120, S. 193, Z. 5. *Auslegung Wagen* に記載なし。)

として、「神が褒めようが蔑もうが、私の力である。」(Nr. 38)²²⁾と記されている。これはスコラ神学者たちが神との関係を各自で決定できるとする考えの表明であり、ここにおいてボーデンシュタインやルターが批判した、徳と業の義に関わる主題が問題となっているのである。馬車の側面にある銘帯(Nr. 36)²³⁾はスコラ神学者の聖書との関係を明らかにしており、上の平信徒とは対照的に、彼らは聖書は善悪を明快に区別するための理性的判断の基盤であるとみなしたのであった。悪魔の真上にある横断幕はこのスコラ神学者の姿勢を「私は思い通りに行動する。正しくもこの馬車は私を(地獄に)追いやる。」(Nr. 33)²⁴⁾という言葉で補足している。

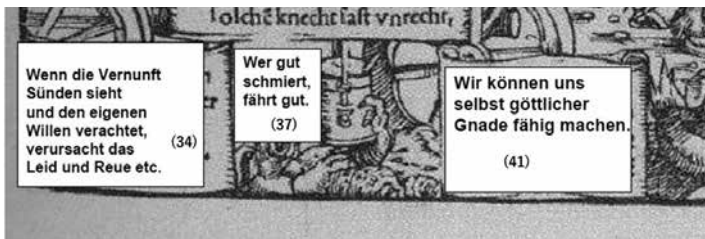


図 4

右の車輪の銘帯は、「自分自身で神の恩寵を受けるに相応しい人間になれる」(Nr. 41)²⁵⁾(図4)とあり、左の車輪には「己の罪深さを知り、己の意志を軽

22) 【訳註】図3<Nr. 38>: Ich hab in mei-/ner macht. dz got/lobt und v er acht. (KGK 120, S. 193, Z. 4 *Auslegung Wagen* に記載なし。)「神が褒めようが咎めようが、私の力である。」

23) 【訳註】図3<Nr. 36>: Gots schrifft gegen sunden ein/want (.) Hilft uns in die werck/zehandt. Dan vernunftt ausz/schriften erkent (.) Wz gut und po/ß genent (.) Als pald d er wil dz/gut annympt (.) Gott mit/milder gnade kumpt (.) Aber vurde/solchen knecht fast unrecht. (KGK 120, S. 193, Z. 7-10 *Auslegung Wagen* に記載なし)

24) 【訳註】図3<Nr. 33>: Ich thu das ich mag. bil/lich furt mich der wag. (KGK 120, S. 193, Z. 3 *Auslegung Wagen* に記載なし。)「私は自分のやりたいことをやる。この車は私を正しい場所へと導く。」

25) 【訳註】図4<Nr. 41>: Wir muegen uns./mit gemeinem in-/flusz (.) Gotlicher ge/nade vehig machen. (KGK 120, S. 193, Z. 12 *Auslegung Wagen* に記載なし。)「私は自

んじることが苦しみと悔恨の原因となる。」(Nr. 34)²⁶⁾として、平信徒たちが掲げる標語を否定している。地獄へ向かう馬車の下には小悪魔が両手に油壺を持って座り、旅を早めるために車輪の軸受けに熱心に注油している。彼の頭上には、「よく油を差す者は、よく走る。」(Nr. 37)²⁷⁾という諺が配された。(図4)

どちらの馬車にも先導者がいて、馬を各々の目的の方向へ誘導している。上段の馬車は、ボーデンシュタインの神学的立場の証人であるアウグスティヌスとパウロが先導している。(図5)

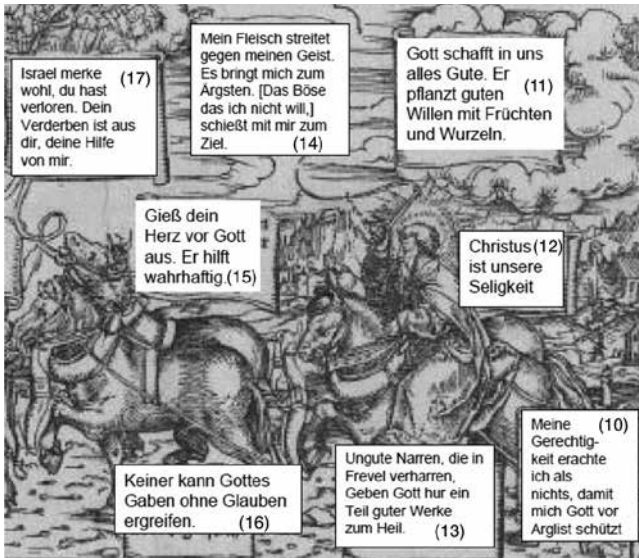


図5

分自身の力で神の恩寵を受けることができる。」

- 26) 【訳註】 図4<Nr. 34>: So v er nufft sunden/betracht. und eigner/wil v er acht. machen/sie leyt und reu etc. (KGK 120, S. 191, Z. 12-13) 「理性が罪を認識し、己の意志を蔑むならば、それは苦しみと悔恨をもたらす」。 So vernunft sunden betracht /Und eygener wil veracht /Machen sie leyt und reu/ Von dem wasser wurst du neu. (*Auslegung Wagen* KGK 124, S. 261, Z. 17-20 und S. 248, Z. 5-7.)
- 27) 【訳註】 図4<Nr. 37>: Wer smirt der/fert. (KGK 120, S. 193, Z. 11 *Auslegung Wagen* には記述なし。) 「よく油を挿すものはよく走る。」

ニブス
後輪から判断してパウロと思われる人物の周りを「自己放棄」を示す銘帯が取り囲んでいる (Nr. 10/11/12/13/14/15/16)²⁸⁾。人は自ら腐敗と悪しか生み出さない。それ故に己の正義を捨てて完全に神に身を委ね、神を信じ、その助けを受け入れることが肝要である。神のみが意志を善とし、悪から守ってくださる。善行によって救われると信じる者は、画面中央近くの銘帯では不義を貫く「愚者」(Nr. 13)と記されている。司教帽からアウグスティヌスと識別できる人物の周りにも類似した主張が張り巡らされている。これらの銘帯もまた心の平穩、自己放棄、罪への洞察を勧めている (Nr. 10)²⁹⁾。「神の御名において行く」(Nr.18)³⁰⁾という銘帯が、これこそが正しい道であることを確信させてい

28) 【訳註】 図 5<Nr. 11>: Got in uns schafft./Alles dz er gut acht/er pflantz guten willen/mit fruchten und wur/tzeln. (KGK 120, S. 189, Z. 9-S. 190, Z. 1). Got yn uns schafft/Alles das er gut acht/Er pflantz rechte willen/Mit fruchte (n) vnd wurtzeln (*Auslegung Wagen* KGK 124, S. 251, Z. 25-28, Anm. 436 を参照のこと) 「神が我々の中に、全て彼が善いと見なすものを創り、実りと根をとまう善い意志を植え付ける。」; <Nr. 12>: Christ ist/unser selickheit. (KGK 120, S. 191, Z. 2 *Auslegung Wagen* に記載なし。) 「キリストは我々の祝福である。」; < Nr. 13 > : Unguttig narren. /so in frevelheit harren./geben got ein tail. gut/ter werck hayl. (KGK 120, S. 190, Z. 8) Ungutig narren. /Die yn frevelheit harren. /Geben got eyn teyl./ Guter wercken heyl. (*Auslegung Wagen* KGK 124, S. 256, Z. 13-16) 「不義に固執する阿呆。救いのための善行の一部しか神に与えない。」; < Nr. 14 > : Mein fleisch streit/gegem geist zu den/ergsten mich reist./Scheust mit mir/zum zil. etc. (KGK 120, S. 190, Z. 2-3) 「私の肉体は私の魂と反目し合う。肉体は私を悪党にする。私が望まない悪は私とともにゴールを目指す」 Mein fleisch streyt gegem geyst./ Czu dem ergsten mich reist/ Das bosz das ich nit will/ scheust mit mir czum tzil. (*Auslegung Wagen* KGK 124, S. 252, Z. 20-23); < Nr. 15 > : Gisz vor got dein/hertz. glaub im er/hift an schertz. (KGK 120, S. 191, Z. 3 *Auslegung Wagen* に記載なし。) 「神の前で心を空にしなさい。神は必ずお救いになる。」; < Nr. 16 > : keiner ist gotli-/cher gaben. an gla/uben. begreiflich. (KGK 120, S. 191, Z. 1) 「神の恩恵を信仰なしに得られる者はいない。」 Nymants ist oberster gaben vehig/ Er sey dan in goth gleubig. (*Auslegung Wagen* KGK 124, S. 259, Z. 18f.).

29) 【訳註】 図 5<Nr. 10>: Mein gerechti-|gkeit acht ich | mist. dz mich | got entheb ar-|ger list. (KGK 120, S. 190, Z. 7) 「神が私を悪巧みから守ってくださるために、私は己の正義を無価値なもののみなす。」 Mein gerechtheit acht ich als mist | Das du mich endthebest arges list. (*Auslegung Wagen* KGK 124, S. 255, Z. 20f.)

30) 【訳註】 <Nr. 18>: In gottes /namen fa-/ren wir (KGK 120, S. 190, Z. 10) 「神の御名において行く。」 In gotis namen faren wir/Seyner genaden begeren wir. (*Auslegung Wagen* KGK 124, S. 259, Z. 4f.)

るのである。

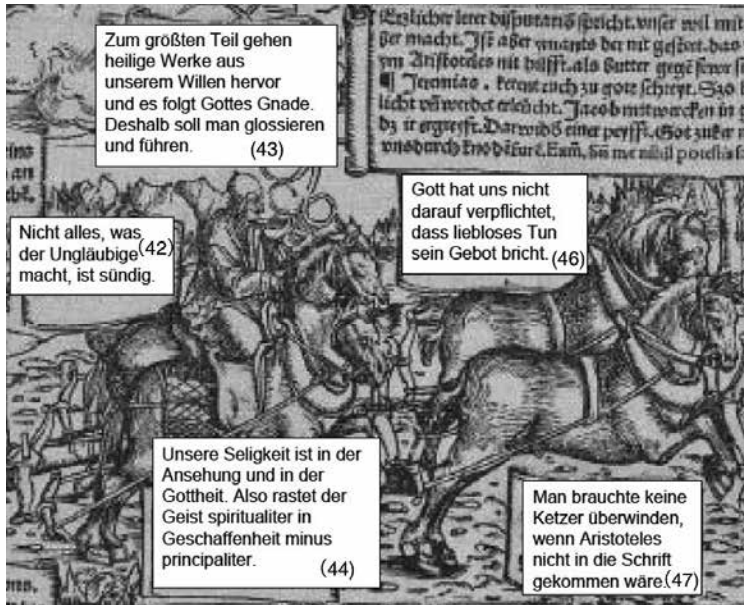


図 6

一方で下の馬車は、スコラ神学者が論理的な論争の証人とみなす哲学者アリストテレスが先導している。彼の周りにある銘帯はスコラ神学者の誤った道を証明しようとしている (Nr. 42/43/44/46/47)³¹⁾。ドイツ語版のビラの記述は彼

31) 【訳註】 図6<Nr. 42>: Nit ist alles sun/dtg. dz macht der/ungläubig. (KGK 120, S. 193, Z. 13 *Auslegung Wagen* に記載なし。)
「不信心な者が為すこと全てが罪ではない。」;
<Nr. 43>: Im grosten teil heyl/g's wercks. geet unser/ wil fur und volget/ gnad gots (.) so sal man/glosiren und furen. (KGK 120, S. 193, Z. 14-15 *Auslegung Wagen* に記載なし。)
「ほとんどの善業は我意からなり、それに神は恩恵を授ける。それゆえに辛辣に批評し、導かなくてはならない。」;
< Nr. 44>: Unser seligkeit ist im/ansehen und gotheit./Also rast der geist spiri/taliter in gschaf-fenheit/minus principaliter. (KGK 120, S. 191, Z. 9-10) 「我々の魂は尊重され、神性なるものである。」
Unser willen selickeyt: steet im ansehen vn (d) gotheit: also rast der geyst spiritualiter: in geschaf-fenheit min (us) principaliter. (*Auslegung Wagen* KGK 124, S. 216, Z. 13-16);
< Nr. 46>: Got hat uns nit ver|pflicht. |Das lieblosz thun sein

らに対する一般的な批判として読むことができるが、ボーデンシュタインは明らかにそこに特定の学者を割り出せるような引用をラテン語版で行っている。ボーデンシュタインは彼らの名前を改悪し、占い師、ワイン愛好家、怒りん坊、狂人と呼んでいる。すなわちこれらの警句が到達すべきターゲットは、それぞれ異なる特定の人物なのである³²⁾。右下の銘帯 (Nr. 47) はラテン語版においては、意志は善にも悪にも通じ、それ故にやりたい放題できると宣言している。ボーデンシュタインはドイツ語版においては、つまるところスコラ神学は異端であるとして、「そもそもアリストテレスの方法論が聖書解釈に適用されなければ、行動を起こす必要はなかったのだ。」³³⁾と、自身の見解をまとめている。



図 7

|gebot verbricht. (KGK 120, S. 193, Z. 16) 「神は、我々に悪行は神の戒律を破るものとは義務付けられていない。」(Auslegung Wagen に記載なし。)

32) Vgl. Zorzin, Alejandro: Karlstadt als Flugschriftenautor. Göttingen 1990, S. 138.

33) 【訳註】図 6<Nr. 47>:keinen ketzer magstu/uber kumen (.) wan Arist:oteles/nit wer in die schrift/genu-men. (KGK 120, S. 193, Z. 17-18 Auslegung Wagen に記載なし。) 「アリストテレスが聖書に入り込まなければ、異端者を克服する必要はなかった。」

さて、2台の馬車の行き先はというと、上の馬車は直接十字架に向けて走っている。この十字架の柱には悪魔の誘惑に負けずに自らを責め、その苦しみを自ら背負うこと、すなわち進んで十字架を背負うことを勧める銘帯が掲げられている。(Nr. 25)³⁴ これは「あなたの十字架を背負い、私に従いなさい」(Nr. 27)³⁵という励ましによって明確に強調されている。これが業の義に対して正しい道であることは、右上の「神の愛は、人が行うことへの報酬として得られるものではない」(Nr. 24)³⁶という一節からも窺える。神の意志、正義と力の表現として十字架は生まれたのであり、人間とその業も唯一十字架に通じているのである(Nr. 29)³⁷。この文言によって再度十字架が中心に置かれ、キリストはあたかも十字架の後ろに隠れるように立っている。この珍しい描写が明快に示すのは「罪人よ、来たれ！」(Nr. 26)³⁸という呼びかけに従う者の道は、十字架に追従する道であるということである。十字架を求める者はキリストを見いだし、キリストの胸の上の銘帯に記された「悲願の平和」(Nr. 30)³⁹を得

- 34) 【訳註】 図7<Nr. 25>: Heuchlery fleiszlich meydt/verfolgung/willig leyt. (KGK 120, S. 187, Z. 11) 「偽善を避け、進んで迫害に耐えなさい。」 Hendl der nacht: das ist heuchlery/in vleis und emssig vormeidt./Die pfeyl am tag fliehe (n) de: das seint/offentlich sturm: vorvolgung/und betrubnus williglich leyd. (*Auslegung Wagen* KGK 124, S. 218, Z. 17-21.)
- 35) 【訳註】 図7<Nr. 27>: dein creucz/nim und/volg mir. (KGK 120, S. 188, Z. 7) 「汝の十字架を持って、私に従いなさい。」 Dein creuz nim dir und volg mir (*Auslegung Wagen* KGK 124, S. 240, Z. 7.)
- 36) 【訳註】 図7<Nr. 24>: Got lieb umb/sunst. (KGK 120, S. 187, Z. 10) 「神の褒美を求めずに愛せよ。」 Goth lieb nicht umb lon. ym glauben und hoffnung fron. (*Auslegung Wagen* KGK 124, S. 214, Z. 3f.)
- 37) 【訳註】 図7<Nr. 29>: Aus tieffen gotis villen/gerechten und starcken./wechst das Creuz. der/ mensch. mit seynen/wercken. (KGK 120, S. 188, Z. 4-5) 「神の深い意志と正義と力から、人は十字架と業からなる。」 Aus tieffen gots willen gerechten unnd starcken. wechst der mensch mit seinem creutz und wercken. (*Auslegung Wagen* KGK 124, S. 239, Z. 12f.)
- 38) 【訳註】 図7<Nr. 26>: kument/yr sunder. (KGK 120, S. 188, Z. 8 *Auslegung Wagen* に記載なし。) Mt 11, 28-30 を参照のこと。「すべて重荷を背負うて苦労している者は、私のもとにきなさい。」
- 39) 【訳註】 図7<Nr. 30>: Unser/ frid. (KGK 120, S. 188, Z. 9 *Auslegung Wagen* に記載なし。) 「我らの平和」

ることができる。キリストこそが真のゴールであるが、それは十字架を通してのみ到達できるのである。落ち着き、我意を捨てて (Nr. 31)⁴⁰⁾ 十字架を背負う平信徒は最後にはキリストの十字架に到達し、悲願の平和に到達できるよう神の恩寵にすがることが許される。ボーデンシュタインの神学のすべての立場は、ここでもう一度要約される。

下段の馬車 (図8) は、怪獣の口のように描かれた地獄の口に向けて猛スピードで走っており、この地獄の描写からも明らかのように、クラナハはデューラーと同じ絵画伝統に従っている。

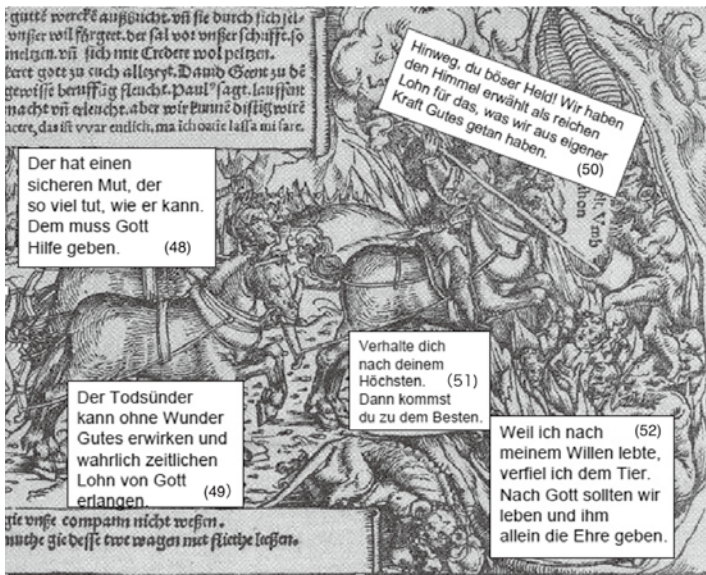


図8

地獄行きの馬車の銘帯から、ゴール直前でも彼らが己の主張の正しさに確信

40) 【訳註】図7<Nr. 31>: gelaszt willen/und dich. (KGK 120, S. 188, Z. 6) 「我意を捨てなさい。」 Gelas eig (n) wille (n) alles dein vn (d) dich. (*Auslegung Wagen* KGK 124, S. 239, Z. 22.)

を持っていることが窺える。能う限りのことをやり、自らの高い目標を志向してきた人たちは極悪な罪人でも善行によって神の恩恵を期待できると信じており、(Nr. 51)⁴¹⁾ 馬車の先頭を疾駆する、聖ゲオルギウスを思わせる騎士は善行によって己の努力で天国を選んだと確信しているのである。(Nr. 49)⁴²⁾ だが地獄の口の前で悪魔を倒そうと槍を構えても既に遅い。最後の銘帯には、避けがたい地獄への転落について述べられている。(Nr. 52)⁴³⁾ 神の意志ではなく、自分の意志に従って生きる者は悪魔の手に落ちる。

右下の銘帯でビラの吹き出しは終了する。ラテン語版において、スコラ神学者たちは自身を定めとするために再び厳しい批判にさらされることになる。ドイツ語のパンフレットは、「もし（地獄行き）仲間になりたくなかったら、この二つの馬車を熱心に読め。」⁴⁴⁾ と、低地ドイツ語の韻文で締めくくっている（図9）。

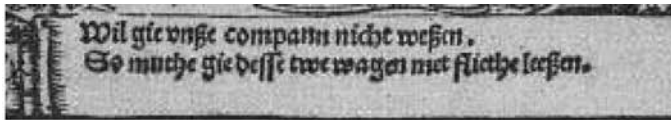


図9

-
- 41) 【訳註】 図8<Nr. 51>: Regir dich nach/deinem höchsten. so/kumpstu zum besten (KGK 120, S. 192, Z. 8) 「高い目標に従えば、最高のものを得られる。」 Regir dich nach deinem höchsten/So kumst du tzu dem besten. (*Auslegung Wagen* KGK 124, S. 261, Z. 1f.).
- 42) 【訳註】 図8<Nr. 49>: Der todtsunder. kan/an wunder. wol wirck/en vnd an spot. zitlich/en lon erlangen von/ got. (KGK 120, S. 194, Z. 1. *Auslegung Wagen* に記載なし。) 「極悪人は奇跡なしに善行を積むことができる。そして確かに神からこの世の褒美を得ることができる。」
- 43) 【訳註】 図8<Nr. 52>: Do ich lebet noch/mir. vil ich in dz dir (.) / Noch got solten/ wir leben. und ym/allein ere geben. (KGK 120, S. 194, Z. 8-9, *Auslegung Wagen* に記載なし。) 「私は己の意志に従ったので、動物になった。神のみに栄光があり、神に従って生きるべきである。」
- 44) Wil gie unsze compann nicht weszen./So muthe gie desse twe wagen met flietze leeszen. (Willst du nicht unser Begleiter sein, so musst du diese zwei Wagen mit Fleiß lesen.) 「我々（地獄行き）の同伴者になりたくない者は、この2台の馬車を熱心に読まなくてはならない。」 (KGK 120, S. 194, Z. 4-5 *Auslegung Wagen* に記載なし。)

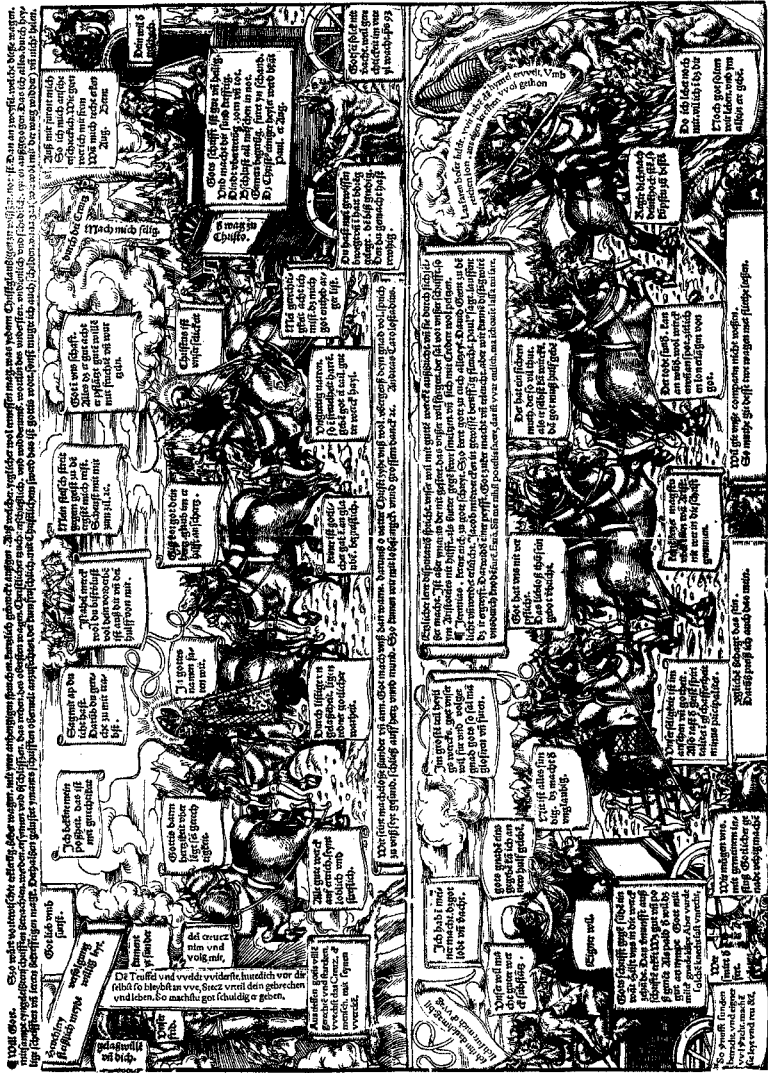


図10 アンドレアス・ボーデンシュタインとルーカス・クラナハ(父)による木版画ピラ『馬車』(1519年)

(出典：展覧会カタログ Lucas Cranach der Ältere, Meister Marke Moderne, hrsg. von G Heydenreich, D. Görres, B. Wismer, Düsseldorf, 2017)

アンドレアス・ボーデンシュタインのビラは、スコラ神学に対抗する宗教改革派の立場表明として同僚や広く一般に向けられたものであった。異なる神学的立場が銘文を使って明確に、かつ攻撃的に定式化され、絵の細部に割り当てられ、クラナハの挿絵はその文脈を明瞭にし、対立する相手を際立たせて結論を導き出している。スコラ神学者が地獄に落ちるとは明示されていないが、それは挿絵の中で生き生きと描写されているのである。

このビラが作成された1519年にはボーデンシュタインとルターはまだ軌を一にしており、共にアウグスティヌスの恩寵の教義とタウラーの神秘主義に言及し、共通の神学的見解を有していた⁴⁵⁾。宗教改革が進むにつれて彼らは激しく対立するようになる。この後ボーデンシュタインは一層急進的になり、ルターは彼から距離を置き、狂信者としてザクセン選帝侯国から追放するように仕向けたのである。ボーデンシュタインは、長い放浪の末、ツヴィングリを介してバーゼル大学に新天地を見いだした。1541年12月24日、彼が同地でペストに罹患して没した時には、かつてのヴィッテンベルクの同僚たちの幾人かは彼が悪魔と一緒に地獄に落ちたと主張したのであった。

45) 【訳註】ボーデンシュタインとタウラーの関連については小田部進一「初期宗教改革における新しい信徒像——アンドレアス・ボーデンシュタイン・フォン・カールシュタットの木版画ビラ『馬車』(1519年)を手がかりにして——」『神学研究』52, 2005年, S. 115-128を参照のこと。